

帝国アカデミーの「知」と1940年代台湾文学の成立 —『台大文学』と「東洋学」を中心に—

張 文薫

はじめに

- 第1節 1940年代文芸雑誌の凝縮—『台大文学』
 - 第2節 「内地人」文芸活動から見た台大文政学部の関係誌
 - 第3節 アカデミーと文壇形成—西川満の再登場
 - 第4節 「東洋学」と「台湾の文学」—黄得時の位置
- むすび

(要約)

本論文は、台湾文壇における台北帝国大学というアカデミーが果たした役割を再検討し、1940年代文壇の形成過程を再考するものである。従来、1940年代の台湾文学については、『文芸台湾』＝植民者側＝悪、『台湾文学』＝被植民者側＝善という単純な二項対立でとらえられてきた。しかし、1928年に設立された台北帝国大学の教授群が、1930年代中期からそれぞれの分野において台湾文化・文学建設に乗り出し、それが1940年代台湾文壇に与えた影響を考えると、この二項対立は無効となる。本稿ではこうした二項対立ではとらえきれない1930年代文壇の人間関係およびその磁場であった台北帝国大学および台北帝国大学「東洋学」という「知」の帝制的性格とその役割を明らかにすることによって、1940年代台湾文学における「内地」と「台湾」との関係を考え直すものである。

はじめに

戦争期台湾の文壇で指導的な役割を果たした論文として、島田謹二「台湾の文学的過現未」(1941年)と黄得時「台湾文壇建設論」(1941年)を挙げることができよう¹。前者は、台湾領有から1940年代初期までの文芸作品について、内地との関係および作者と読者層を基準に三期に区分してそれぞれの状況を記述し、そのうえで西欧の植民地旅行文学に範をとって台湾文学の新たな方向性を日本の「外地文学」に定めた本格的な比較文学論文である。後者は、台湾の文学者について、中央文壇への進出を志向した者と台湾独自の文壇を建設しようとしたグループとに二分し、その上で「地方文化の確立」を打ち出した論評である²。島田論文は『文芸台湾』陣営の、黄論文は『台湾文学』陣営成立の支柱的理論として、それぞれ所属作家の創作活動と文芸観に大きな影響を及ぼした。これら二篇に加え、1940年代台湾の文壇を論じる際に見逃せない論文が工藤好美「台湾文化賞と台湾文学」(1943年)である。同篇は、台湾「養リアリズム」論戦に点火した論文であり、『文芸台湾』と『台湾文学』の対立及び所属作家の思想性を明らかにしたものであった³。

上述の三論文から窺われるように、1940年代の台湾文壇には『文芸台湾』グループと『台湾文学』グループとが対立的に存在していた。両陣営の対立は、西川満が『華麗島』(1939年1月)および文芸誌『文芸台湾』(1939年12月)を創刊し、1937年の漢文欄廃止以降の「空白期」が終了した時点に遡る。黄得時および張文環、中山侑らが高圧的な西川に不満を抱いて『文芸台

湾』を離脱し、新たに創刊したのが『台湾文学』であった。こうして形成された『文芸台湾』と『台湾文学』両陣営の対立という図は、現在の台湾研究における共通認識であり、民族性や文学意識などが複雑に絡みあう1940年代文壇の勢力関係を明快に裁いたものと言える。しかしこの対立図からでは、両陣営における共通性、たとえば1920年代以降の新文学との連続性や、台湾民俗素材の多用や歴史ものの増加などの戦争期における文学現象を説明することは難しい。複雑な1940年代の文壇や文学現象を解釈するためには、この対立の成立過程を検討しなおすことが必要であろう。

その際に注目すべきは、本島人と内地人とが混在する1930年代台湾文壇のキーパーソンであった西川満と⁴、『文芸台湾』創刊を西川と連名で新聞に発表した黄得時の存在であり、さらに彼らの文学的「知」の形成に影響を及ぼした台北帝国大学文政学部（以下、台大文政学部と略称）という磁場である。上述の三論文の作者——島田謹二、黄得時、工藤好美——もみな台大文政学部の関係者であった。

小論は、帝国大学というアカデミーの持つ学術権威が、政治・社会状況に敏感な植民地の文学・文化状況に及ぼした影響について、それがいかなるメカニズムのもとに作用したかを学術史と文学史の視角から論じるものである。さらに、当時文壇の形成の主要な推進力となった西川満と黄得時に注目し、両者の言動とその背景を解明することで、台湾文学テキスト生成の構図を新たに描き出すことを目的とする。

第1節 1940年代文芸雑誌の凝縮——『台大文学』

1936年1月、『台大文学』は台大文政学部の学生団体「台大短歌会」によって創刊され、停刊まで9年という異例の長寿を遂げた。この雑誌は二ヶ月に1冊発行され、1年を通して1巻としたが、戦時中の物資不足から第7巻以降は不定期となり、最後は1944年11月、第8巻第5号をもって停刊した。全8巻の執筆者には1940年代文壇で活躍する重要な作家や論者が顔を揃えている。その中には、後に『文芸台湾』の主要な推進者となる新垣宏一・新田淳・萬波教・島田謹二・矢野峰人、『台湾文学』の黄得時・工藤好美・中村哲、さらに『民俗台湾』の稲田尹・浅井恵倫・金関丈夫がいた。1940年代にはそれぞれのグループで活躍する彼らが1930年代には同一誌で活動していたという点から、『台大文学』の特異性と文学史的価値が認められよう。

創刊号に掲載されている「台大文学発刊の辞」には、「皇化、高山国の故地に及びてより、星霜既に四十年、Ilha formoseの美称、今において、名実その完きを見る」現在こそ「台大文学生」という宣言が掲げられ、編集後記「余滴」欄では、「我々台大文学部学生は前々から我々の文学雑誌を持ちたいといふ希望を抱いてゐた」との抱負が述べられている。このような記述から、創刊者らは台湾の文化を切り開く意欲をもって『台大文学』を創刊したことが看取される⁵。「私達若き文科の学生がああ研究室の万卷の書にうづもれつゝ文學の鬼と闘つてゐる時、私達の間に誰ともなく言ひ出したのがこの『台大文学』發刊のことである」と新垣宏一が述べているように、『台大文学』は、当時台大文政学部の在學生であった新垣宏一、新田淳、秋月豊文、中村忠行、服部

正義、岩壺卓夫らが発起人となり⁶、学生らが編集を行った雑誌であった。

しかし、同誌は文芸誌でありながら創作よりも教員・学生による学術的文章が頻繁に掲載された。学生の創作が中心であるはずの文芸誌の巻頭に、教授の論文や翻訳、詩文が掲載されることに対し、会員の反応は様々であった。例えば新垣宏一は雑誌の価値が上がると喜び、「これが大自慢なのだ」と興奮する一方、秋月豊文は自嘲気味に学生創作の未熟さの「埋め合せ」だと説明し、中村忠行は「本号には創作はあつまらなかつたが、次号あたりからは作品」で誌面を満たすという意欲を見せた。

そもそも学生達が目指したのは、「市場文芸のそれに比べられない」「独自性」「純真性」を具え、「生命の底に流れる美しい」「文学に対する情熱と意気だけ」の創作であったと考えられる⁷。しかし、『台大文学』は発刊当初から文学性と学術性の双方を有していた。たとえば「台湾文学発刊の辞」には、雑誌創刊の理由として、台湾の自然環境に対して「無窮を思ひ、水に臨みて悠久を嘆ず」、「胸奥の琴線に触る」ような詩的な感興と、「玄理を扶桑の古に繹ね、明珠を滄溟の深きに探る」ような学理的な探求とが記されている。さらに、表紙の「台大文学」の四字は弘法大師『聾瞽指歸』からの集字、表紙模様は台北帝大土俗学標本室所蔵のパイワン族の器具、「出草」欄の口絵は総督府図書館所蔵の「番社采風図 捕鹿」、扉のカット絵は台北帝大所蔵の西洋稀書物といった配置は、文政学部の中心的な学科である国文学、史学（南方土俗）、西洋文学の特色を取り入れたように見える。さらに、巻頭に掲載されているのも各分野の文学論で、第2号には世阿弥「覚習教条」（国語国文）、第3号には「文鏡秘府論」（東洋文学・国文）、第4号にはボワロー「詩学」（西洋文学）、第5号には白秋「雀の卵」（近代文学）であった。こうした編集から、『台大文学』を、台大文政学部を代表するアカデミックな文芸誌にしようとする刊行者の意気込みが読み取れよう。

また、『台大文学』は事務所を台大校内の国語学国文研究室に設け、「台大短歌会」は「本学教官」「本学職員生徒」を優先的に入会させるという半排他的な会員制を採用していた。こうした措置は、『台大文学』の「同人誌」的性格を決定付けるものであったが、それは同誌の特徴であると同時に問題でもあった。「同人」とは単に同じ理念を持つ者を指すのではなく、文政学部関係者という共同性が要求された。

「台大短歌会」は、短歌のみならず「一般文学」をも視野に入れていたため、創刊号は詩、漢詩、短歌、論文から構成されていた。短歌は、創刊号から第4号までは創作部分の首位を占めていたが、第5号では激減し、「短歌は二人きりで淋しい」と記されている。そして「本号頁数が少いが、次号は中村君が増頁で立派なもの」となると明言したものの、創作不足という創刊当初からの問題は解消しなかった⁸。次号の第6号では、創作は短歌4首、詩2篇、随筆1篇、小説1篇と増えたが、一方論文も4篇と多くを占めるようになった。

同人たちは、「台大短歌会」という名前の故に創作が集まらないと考えたためか、第2巻第1号以降、『台大文学』を「新興の組織になる台大文学会の手に乗せる」ようになった。「一般文学の研究を以て目的とす」る「台大文学会」は、「台大短歌会」を拡充したような組織であった。雑誌の編集を「台大短歌会」から「台大文学会」へゆだねたのは、伝統的な文学形式である短歌

中心の雑誌から、詩や小説の創作中心の雑誌へと編集方針を転換させようとする意図があったことが窺い知れる。

しかし、彼らの意図に反して創作原稿は減少の一途を辿った。第2巻全6冊に収録された創作はわずかに短歌7首、俳詩1篇⁹、漢詩1篇（神田喜一郎による）、英詩1篇だけである。組織名を変えても文学創作が集まらないという、台湾の文芸雑誌につきものの危機が『台大文学』にも襲いかかった。その埋め合わせとして学術論文を増やすことでその危機を乗り越えたところに『台大文学』の特徴が表れている。第2巻からは神田喜一郎と原田季清の両教授が執筆陣に加わり、第3巻では中村哲が随筆を発表している。第4巻第4号は安藤正次教授の還暦記念論文集として創作抜きで構成され、第4巻第5号も全て論文であった。それを補うように、第4巻第6号では島田謹二の「書評」以外は全て詩と歌で埋められたが、もはや『台大文学』の学術誌化は止まらず、誌面から創作が消えた第5巻以降は文芸誌とは呼べず完全な学術誌となった。

そもそも創刊成員がみな「台大短歌会」から「台大文学会」への変更を歓迎した訳ではない。「総て当台北帝大文学科関係の能力を集束してなるもので従つて本誌今後の活躍も」期待できるという好意的な考えをする者もいれば、「今度は編集の方針を多少変へてみた。無論いろいろな意見はある（中略）。しかし明年度からはこんな放胆な編集はあまり出来ないのではあるまいかと考へると私は今度の号に対して限りなき愛着を覚へる」とためらいを見せる者もいた¹⁰。文芸創作を重視したいと考える学生の中に、「放胆な編集」ができないこと、つまり教員の意向と都合が編集方式と方針に与える影響力を敏感に察知した者がいたのであろう。しかし、「今迄非常に編集上の手狭さを感じてゐたが、来年度から新たに国文、英文、東文の緊密な連携」により状況を改善するというように、第2巻から第4巻まで編集作業に携わった萬波教が、雑誌発行の困難を打開する方策として、「提携」即ち文学科の協力を求めたことに象徴されるように、大学側に指導や助力を求める以上、『台大文学』の運行は文政学部という大学機関の都合に左右されるのはやむを得ないことであった。

さらに創始成員の卒業が同誌の性格の変更を余儀なくさせた。例えば1937年3月に新垣宏一が、1938年3月に新田淳、秋月豊文、中村忠行、服部正義の四人が卒業したため、第2巻第4号以降の編集と原稿収集の担当は、1937年入学した萬波教へ、第4巻第2号から第5巻第2号までは1938年入学の喜久元八郎へ、学術誌化した第5巻以降は、卒業生で1939年に文政学部助手となった稲田尹へと交代した。

第2巻第1号からは、「前の仕事を文学科全体で揃つてやらうと」するため「彙報を加へる」ようになり、それと入れ替わるように、創刊当時に文芸や作品を自由に論じる「出草」欄が消えた。「彙報」の内容は東洋文学会・国文談話会・英文科会などの学内読書会の例会消息や研究成果発表及び文学科講義題目など学内消息を掲示するものであった。そして第3巻第1号以降は「受贈交換図書目録」が不定期に掲載された。同目録には島内の文芸誌『台湾』なども入っていたが、殆どが日本内地の学術誌であった。台大文学会の代表者が安藤正次から矢野禾積に交代する際には、編集陣が「矢野先生を中心に編集会議を」開いて「今後の方針について」打ち合わせをし、次号から会報の他に内外文壇消息、新刊紹介、台湾に置ける文学活動の紹介と批判などで内容を

充実させていくことが決定された¹¹。

こうして『台大文学』が、東京帝国大学『帝国文学』に擬した「文科の総合雑誌」に変身し¹²、学術誌化することは、創刊成員の学生たちには思いもよらなかったであろう。ただし、創作に「独自性」「純真性」を求めて「新しい出発」を目指すという創刊成員たちの意気込みは、『台湾文芸』『台湾新文学』『媽祖』などが併存していた1936年時の台湾文芸状況にあまりに無頓着であったといえる。新垣宏一も黄得時も「台湾文芸聯盟」の成員としてこれらの雑誌を知っていた筈である。それに関わらず新垣が『台大文学』創刊に尽力し、他の成員も文化の開拓者のように振舞ったことから窺い知れるのは、1930年代中後期にいたるまで、台湾文壇では「本島人」と「内地人」との文学活動が画然と隔離していたということである。お互いの存在を意識しながらほとんど交流を持たず、評論などで干渉することは慎まれていた¹³。このような隔離状態は、1940年代の戦時期に入ると、日本語の普及などの社会的条件により、両者が合流する下地が整えられるに至った。しかし後に論じるように、両者の合流を決定づけたのは、台大文政学部教員陣と西川満の出会いであった。

『台大文学』から創作が消えた第4巻と同時期の1940年、西川満によって『文芸台湾』が創刊され、その創刊号に新田淳が加わった。それ以降、『文芸台湾』の執筆者に新垣宏一や中村忠行、服部正義らの名前が見られるようになった。つまり『台大文学』を創作の舞台にしようとした学生らは、『台大文学』が学術誌化する蔭で、『文芸台湾』という新たな創作の舞台を与えられたのである。一方、『台大文学』に参加しつつも同誌とは距離を保った黄得時は、西川満と連名で『文芸台湾』発刊宣言を新聞に発表し、『台湾文学』の成立後も『文芸台湾』から脱退せずにはいた。1940年代台湾文壇の重要な人物のうち、『文芸台湾』側に属した者の多くが『台大文学』出身者であることが看取できるが、実は『民俗台湾』、『台湾文学』の創刊も『台大文学』及び台大文政学部と大きく関係していたのである。

第2節 「内地人」による文芸活動から見た台大文政学部の関係誌

台大文政学部の関係者による文芸誌は『台大文学』が最初ではない。台北帝大が創立された1928年12月には早くも『THE FORMOSA』が刊行されている。同誌は「台北帝国大学文政学部の助手、学生など若きインテリの文芸雑誌」と期待されながらも一号で停刊となったが¹⁴、文政学部の関係者では、赴任したばかりの工藤好美と史学科生徒の柯設偕の名前が確認できる。「創刊の言葉」には、「青き細き一線となつてなつかしき故国の遠くうすれゆくとき、一切の過去はきさに閉ぢられんとすつ一卷の書」という詩的な文句が連なり、台湾島内の文化状況について「思想的無風帯の小天地に、無力追従の官僚と退嬰幼稚の言論機関とは、思想の浅薄固陋怨乱と習俗の奢侈腐敗墮落とを矯正指導すべき社会的批判は昏々として眠り、ただ模倣事大の僭称芸術家と頑迷事勿れの似而非教育者」が存在するという現状への批判が述べられている。そして文末に「美しき緑の島の若人よ、自覚せよ、大いなる使命あるを、朗らかに表現すべく雄雄しいのちを」、「芸術哲学社会歴史に関する研究はこの島と人に即して、如何なるものを創造せんとする

か、『フオルモサ』の問題とするところである」との意気込みが示されていた。台湾を「思想的無風帯」と警えるのは中山侑の口癖であった点から、当時文政学部の雇員であった中山が『THE FORMOSA』創刊に参与していたことが推測できる。

「創刊の言葉」に詩的文学性と現状改革への意欲が混在するように、『THE FORMOSA』は、内地を舞台にした小説や台湾を舞台にした幻想な詩、抒情詩、台湾民謡に関する散文、現象批評、論文から構成されていた。同誌には工藤好美によるシェークスピア詩の翻訳も掲載され、「工藤氏の翻訳は学界の注目する所である。ここに同氏のご好意とご援助とに感謝する」と評されている。また「仙致金」というペンネームで発表された「歴史小説 高仙芝」には、「作者は『我大学屈指の東洋学者である』」と記されていた¹⁵。こうした点から見て、『THE FORMOSA』は、台大文政学部の教授の支援を得た学生・雇員・助手が台湾文化の革新を目指して創刊した雑誌であったことがわかる。このように創作と論文とが並存する形は、『台大文学』の前身と見ることが出来る。

『THE FORMOSA』以外にも「台大文政学部の若い助手連中」によって刊行された雑誌がある。『THE FORMOSA』刊行以前の1928年6月には短歌誌『水田と自動車』が、『THE FORMOSA』停刊後の1929年11月には雑誌『赤い支那服』が発行されたが、これら雑誌には必ず中山侑の姿が見える¹⁶。助手や学生のみならず、教授らも寄稿した『THE FORMOSA』を、台大文政学部関係者が学術権威をもって台湾文芸界に参入した第一歩とするならば、台大文政学部と台湾の文芸界との最初の架け橋役を果たしたのは、1932年まで台大文政学部の雇員を勤めた中山侑であった。

中山侑は、『台湾文学』創刊の際、張文環とともに『文芸台湾』から離脱した「良心的な」内地人文学者として知られている。彼は1940年代における活躍のみ評価されがちであるが、その早期の文芸活動の広さと豊富な人脈は、『文芸台湾』対『台湾文学』という構図だけでは説明することはできない。例えば1926年8月、「北台湾詩人聯盟」により詩誌『扒龍船』が出版されたが¹⁷、この雑誌の同人に西川満と中山侑がいた。同誌は表紙から装丁まで全てが質素に作られ、わずか1号で停刊した。同誌に中山侑は京山春夫のペンネームで、民俗風の抒情詩「別れ」、前衛的な詩「夏」、叙情的散文「遠い幸福」を発表している。西川と中山は台北一中の先輩後輩であり、二人は文芸創作に対する意欲に燃えて意気投合し、共同で雑誌を作ったのであろう。

『扒龍船』発刊の辞に、「昼は炎天百二十八度。夜は北緯25度に眺むる熱帯火星の赤眸。其処に生まれる芸術は南国の強烈なる色彩を多分に含んで（中略）我等扒龍船の同人にこれら色彩灼灼たる熱帯芸術の味をそしてそれに共ふ独特の雰囲気をも無限に漂はせて進もうという抱負が述べられている。こうした文章に表れているように、西川満の文学性は、「南国的」かつ「強烈なる色彩」に溢れる「熱帯芸術」創造への情熱に根ざしていた。一方、民俗的かつロマンチックな語彙で詩と散文を綴り、『扒龍船』に違和感なく溶け込んだ中山の文芸活動の原点も、西川と極めて近いものであった。

裏川大無「台湾雑誌興亡史」によると、在台内地人の行った文芸活動の嚆矢は明治32年であり¹⁸、大正の終わりまでに数多くの文芸誌が発行された。それら文芸誌は殆どが俳誌と歌誌であっ

たが、俳誌『ゆうかり』と歌誌『あらたま』以外、全て三号で停刊した。近代的文芸を目指した裏川は、「現下の台湾に於ては、文芸雑誌は俳句を主とするものにあらざれば到底存立六ヶ敷かるべく」と、昭和以前の台湾では俳句や短歌あるいは漢詩などの伝統的な創作形式以外は文芸誌が存続しない未開の状況を淋しく物語っている¹⁹。小説や戯曲と異なり、気軽に創作できる俳句と短歌は、領有期から台湾に赴いた内地人に支持されていたのであろう。「本格的な文学作品」、「文学運動と言ふ一つの精神的昂揚への飛躍」²⁰を追求する詩や小説、戯曲などを掲載する文芸誌は、1917年6月創刊の『人形』を待たねばならなかった。その後1922年頃、ようやく「文学青年の趣味の境地」を脱し、「文学と共に生き、文学と共に死ぬ」という真剣な態度で文学に臨む詩人が現れた。台中の後藤大治と岩佐清潮、台北の上清哉と藤原泉三郎である。そして1926年年末、「台湾詩人組合」が組織され、後藤や岩佐、上、藤原の他、西川満と中山侑が名を連ねた。詩誌『扒龍船』が刊行されたのはこの1926年である。

台湾詩人組合はすぐに解散したが、以上の状況から、西川と中山の文学活動の意義の意味と、『扒龍船』の文学史的意味が見出せるだろう。それは、漢詩文・俳句・短歌を中心とする伝統文芸のみが受け入れられていた時代に、新しい文学形式——それは主に詩であるが——を創作することによって新たな時代を切り拓こうとしたものであったといえよう。ただし創作力および組織力などの貧弱さによって、これら文芸雑誌は夭折の運命を辿らされることとなった。しかし、その後西川と中山の両者が東京に赴き、彼らが台湾を留守にしている間、文芸雑誌の運営に大きな変化が生じたのである。

昭和期台湾における「内地人」の文芸活動の開始は、台北高校の生徒や台北帝国大学の学生による校内団体の文芸界への参入であろう。台北高校の文科生同人は、1926年3月に『翔風』、1927年2月に『足跡』、1928年に『南方文学』、1929年4月に詩文雑誌『風琴と壺』、1931年に富名腰尚武による『カドラン』を発行するなど、実に多くの雑誌を世に出した。一方、先述したように台北帝大文政学部は1928年から『水田と自動車』、『THE FORMOSA』、『赤い支那服』を相次いで発行した。アカデミー外では、1927年3月に保坂瀧雄編集『詩火戦』と『創生』、同9月に藤原泉三郎編集『無軌道時代』、1931年2月に上清哉編集『円卓子』、同9月に「台湾文芸作家協会」による『台湾文学』、そして1934年10月には西川満編集の詩誌『媽祖』が創刊された²¹。中でも『無軌道時代』、『円卓子』、『台湾文学』は、大正以来の古参詩人である藤原泉三郎と上清哉が同時期の日本内地で盛んであったプロレタリア文学運動の影響を受けて発行した雑誌であり、詩の創作に新たに政治性、社会性の要素を持ち込んだ。

ところで、アカデミーの内外問わず、これらの雑誌のほとんどに中山侑が関与していることは注目に値する。中山は1927年3月に台北一中を卒業した後、1928年末まで台北高校の雇員として勤めていたが²²、1928年から1932年2月まで台大文政学部に雇員として勤めた²³。両校での勤務時期は、『翔風』、『足跡』、『水田と自動車』、『THE FORMOSA』、『赤い支那服』の発行時期と一致する。『翔風』、『足跡』の主力成員である今澤正雄や土方正己は、中山と「台湾詩人組合」以来の旧知の仲であった。また保坂瀧雄、上清哉、藤原泉三郎も「台湾詩人組合」の成員として中山と関係が深く、とくに藤原は、中山の1933年秋の帰台後、ともに演劇活動に従事する仲であった。

政治的な要素の有無に関わらず、文芸愛好者の発行する文芸誌が夭折したのに対して、台北高校の『翔風』、台大文政学部の『台大文学』はほぼ終戦まで存続した。この現象は、学校団体の持つ組織力と資源が一個人には及ばないほど強固であることを物語っている。中山侑は、『翔風』が「今までに見ない新しい文運の興隆」を起し得るのは、「学生達の野心的な文学的情熱」のためだけではなく、台北高校の多数の教授と生徒が内地から「中央」の芸術の洗礼を受けて渡台したからだと述べ、「台湾の様に文化的におくれた、特殊な土地に於ては、統制ある力を持つ団体（大学その他の学校、官庁等の事業団体）があらゆる機会を利用して文化運動に参加する事は最も有意義な事ではなければならない」²⁴と述べている。

一方、『台大文学』は学校側と緊密な関係にあったため、学術的文章が創作を駆逐するという結果を引き起こしたものの、アカデミーの力で刊行され続けた。このことは、同人的であるが故に中絶しがちな文芸活動において、教授や学生がもたらす思想的・芸術的な刺激の影響や、「統制ある力を持つ」指導力と組織力というアカデミーの資源がもたらす結果を、台湾で文芸を志す中山侑に思い知らせたといえる。

第3節 アカデミーと文壇形成—西川満の再登場

中山侑は台北帝大を退職したのち、東京に赴き、同地滞在中にプロレタリア運動に関与したと思われる。帰台後、左翼文学雑誌の編集経験を持つ藤原泉三郎と共に劇団運動に従事した。一方、フランス文学を専攻した西川満が早稲田大学の恩師であった吉江喬松から「南方は光りの源。我々に秩序と歓喜と華麗と与へる」という言葉を得て帰台したことはよく知られている。1933年5月に帰台した西川は、1934年1月台湾日日新報社に就職し、半学術的な『愛書』の編集に携わり、さらに同年10月、媽祖書房を立ち上げて詩誌『媽祖』を刊行した。『媽祖』は1938年に停刊し、『愛書』は1939年に刊行が不安定となるが、この期間、二誌を通じて培った人脈と文学的知識によって西川は1940年代台湾文学の立役者となった。

帰台後、『媽祖』を創刊した西川は、1934年12月には『ネ・ス・パ』に、1936年3月には『Kritiko』に参加し、ここで既に二誌に参加していた中山侑に再会した。それは旧来の文学の同志との再会ではあったが、すでに理念の相違が二人の間に現れていた。1935年7月、『ネ・ス・パ』に掲載された西川の「南方田舎文壇」には、左翼文芸誌編集の経験を持つ上清哉や藤原泉三郎そして中山侑に対する違和感が綴られている。²⁵かつての文学の同志であった西川と中山は離れつつあったのである。その一方、西川は『媽祖』や『愛書』の編集を通じて、台大文政学部教授群という新たな支援者を得つつあった。島田謹二は当時早稲田大学で教鞭を取っていたフランス文学者山内義雄の紹介によって西川満と知りあった。もっとも、二人が接近するのは、西川の台湾日日新報入社後のことである。島田の回想に、『愛書会』の集会から、自分は急に同君に対して好意をもち始めるやうになつた。それは純粋な芸術への愛に於てひそかに共通してゐることを感じたからである。やがて『媽祖』が生まれた。これによつて自分は同君が台湾の風物の中に新詩境を見出してゐる立派な詩技の持ち主であることを知つた」とある²⁶。これは島田謹二、山内義雄、吉江

喬松、西川満というフランス文学研究者という関係に加え、『愛書』そして『媽祖』の労作により、西川満が島田の支持を得たことが看取できる。西川は詩の創作を中心に文学活動を行い、自力で雑誌を発行する一介の文学青年に過ぎなかったが、「書誌学を中心としての諸種の研究、並に大衆の教化」を宗旨とした『愛書』の編集を主宰することにより、文学活動の組織力を認められるようになっていったのである。

『愛書』は「台湾愛書会」の機関誌である。「台湾愛書会」とは、昭和5、6年に台北帝大の書物愛好者が中心となって結成した「書物の会」が、「私の会として終始するのはあまりに惜しい足跡を刻みつつ」あったことから、台湾日日新報社長の河村徹および台湾総督府館長の山中樵、台北帝大文学講座教授の植松安の呼びかけにより、『書物の会』の社会的進出を図るために組織された会である²⁷。「台湾愛書会」の創立成員は、河村徹、大澤貞吉（以上台湾日日新報社）、山中樵、市村栄（以上総督府図書館）、植松安、瀧田貞治、田中長三郎、澤田兼吉、武田虎之助、矢野禾積、島田謹二、神田喜一郎（以上台北帝大）という、その殆どが台大教授と図書館関係者であった。西川満は台日入社後、社長の河村徹の命によって第2輯から『愛書』の編集に参加した。

西川が参加したことで、第1輯から「台湾愛書会」に参加していた帝大図書館司書、のちに「台湾雑誌興亡史」を著した裏川大無との間に確執が生じる。西川は第1輯の表紙と内容について、「書誌学の叢書みたいな感じがする。会員をふやすためには、学究的であるよりも、もつと趣味的」にしたいと述べたが、これに対して²⁸、裏川は「第一号の表紙に対する不評は多いが、私達の編集者の観るところでは文字と体裁が『愛書』の内容にふさわしい」と反論した²⁹。だがその反論を無視して西川は第3輯の表紙に彼の長年の親友である宮田弥太郎の作品を採用した。それに対して裏川は、いままでは「個人雑誌のやうに自分一人で気儘な雑誌を作る」ことができたのに、今回は「沢山の人が共同して作る雑誌」となり、「最後に妥協」が必要とされると不満を表現している。また、裏川が編集後記で本号の内容解説をしているのに対し、西川は雑誌内容とは無関係の文、たとえば「壁に金紙を貼つて」「天上聖母に季節のよろこびを謝念する」「白い花びらが星のやうに天蓋から降ってくる」「わたしは濡れた真珠を掌にころがして、更けゆく夜霧を感ずる」といった台湾民俗宗教の意匠を詩的に綴った³⁰。両者は編集のセンスも文学性も対極にあり、それによって確執が深まっていった。やがて西川は、裏川の仕事であった原稿収集にも干渉し始め、第4輯を装幀特集号、第5輯を図書保存特集号として作らせ、「台湾愛書会」成員以外の原稿を日本内地から集めた。こうした特集に対し、裏川は「唯、欲を云へば、今少し科学的な研究論文を欲しかつた」と曖昧に反感を示したが、西川は全く頓着しないばかりか、「本文の組方その他は前号に準じたが、表紙は従来のを破つて南国にふさはしい華麗なものとした宮田弥太郎氏の筆である」と自信満々に述べている。やがて第6輯になると、裏川は「第6輯編集集中に突如起つた心の旋風が、わけもなく私の身体を内地に拉して去つて仕舞つた」という言葉を残して『愛書』と台湾を去った。西川は裏川の突然の辞職についても顔色を変えず、ただ「特集二冊の後をうけて、今号は変化ある内容のもの」を、そして「表紙は木版、色刷口絵～華麗島独得の味があらう」と述べている³¹。「台湾愛書会」創立時の成員であり、『愛書』は書誌学的な雑誌として「科学的」に仕上げたいと考えていた裏川と、「読書家」より「愛書家」であると自他ともに認め、形式と

装丁に凝った文芸雑誌を目指した西川満との相違はあまりにも大きかったといえよう。

裏川が「台湾愛書会」から去った後、西川は『愛書』の編集や装丁を思うままにしたのみならず、書物に関する身辺雑記風散文「日孝山房童筆」を連載するようになった。こうして西川は、矢野峰人と島田謹二の両教授をはじめとする帝大教授の前に、『媽祖』と『愛書』という両誌を通して、その編集能力と文学的才能を示すことにより、総督府図書館と台北帝大教授群への仲間入りを遂げた。以来、西川は島田謹二から創作に関する理論指導を受け、台湾民俗と熱帯的意匠という個人的嗜好を「南方性」「外地性」という文学性にまで高めたことで、日本文学において特異な位置を占めることとなった³²。

こうして『台大文学』を支えた文政学部関係者は1930年代後期から台湾の文芸活動への進出を図るが、その陰には矢野禾積、島田謹二ら台大教授と西川満との結合があった。西川満は同人雑誌を発行する一文芸青年から、モダン・メディア『台湾日日新報』とアカデミー台北帝大という、近代文学および植民地的「知」を推進する上での主要組織をバックに擁する文学者へと変身を遂げたのである。

第4節 「東洋学」と「台湾の文学」——黄得時の位置

これまではおもに、1940年代戦争期に大きな飛躍を遂げた「内地人」文学の成立前史における帝国アカデミーの文学活動を論じてきた。本節では、1920年代の「新文学運動」以降の「本島人」文学にも影響を及ぼした帝国アカデミーの「知」について論じたい。それは台北帝国大学における「東洋学」である。

台北帝国大学は、日本の南方政策の基盤を作ることを目的に創立された機関であるため、大学の特色を論じる際、史学部を設置された「南洋史講座」と「土俗人類学講座」などの「南洋学」が注目の的となることが多い。しかし文学文芸の生成という視点から見た場合、台北帝国大学における「東洋学」の成立こそ、植民地であった台湾の文化・知識の形成に大きな影響を及ぼしたことが見出せる。

7世紀以来、日本においては「中国」に対する関心と研究を目的に形成され学問分野はおもに、「中国学」と「漢学」との両分野である。前者は、中国の思想、文学、文化を中国本来の方法や視点により分析、後者は国文学と連携して、ときには日本漢学もその範囲に入れ、中国の学術文化を日本独自の方法で論じるものであった。これらは、日本の世界観と自己認識に大きな作用を及ぼしてきた。しかし伝統的な華夷の図式が動揺しはじめた明治期になって、「西欧」を基準として中国との位相を図りなおすべく成立されたのが「東洋学」である。それは世界を視野に入れて自己の位置を捉えなおそうとして成立した「近代日本アカデミズムの特産」であったが³³、実はその成立過程に大きく影響していたのが植民地「台湾」の存在であった。

京大教授であった内藤湖南（虎次郎）および鈴木豹軒（虎雄）は、伝統的な漢文学と中国学の境界線を揺るがし、「東洋学」において巨大な功績を残した碩学であるが、両者は大学の教職につく以前、新聞記者として台湾に滞在した経歴をもつ。また、中国行政学・経済史学の開拓者で

ある東大教授・加藤繁も、「臨時台湾旧慣調査会」の嘱託として八年間勤務し、『清国行政法』の執筆に貢献している。台北帝国大学文政学部の初代学部長である藤田豊八や、東洋文学講座教授であった神田喜一郎、助手前島信次も皆、碩学で知られる高名な東洋学者であった。とくに藤田豊八は羅振玉、王国維とも親交を持った東西交渉史・西域史の大家であった。彼は台北に赴任して一年で亡くなったが、その東大東洋史の同僚である市村瓊次郎も台北帝大に短期出講している。

ところで、張文環や中山侑とともに『台湾文学』を創刊させた立役者である黄得時は、まさに台北帝大東洋文学講座の出身者であった。黄得時は、論文冒頭で述べたように1941年に発表した「台湾文壇建設論」をはじめ、一連の台湾文学と文学史の論説を打ち出した。そして、それらの著作によって、『台湾文学』陣営成立の支柱的理論として、それに所属作家の創作活動と文芸観に大きな影響を及ぼした人物である。台湾特有の「地方文化」を戦時期に建設させようとした黄得時の行動は、現在にいたるまでつねに高い評価が与えられている。黄得時は台北郊外の名家の出身であり、総督府評議員の父・黄純青も名高い漢詩人で、台中で結成された「台湾文芸聯盟」大会には親子で出席している。幼少時より中国古典の教養を身につけた黄得時は、張文環、呂赫若、龍瑛宗ら同世代の台湾新文学者のなかにあつて、文言文も白話文もできる特異な存在であった。黄得時は一年間の東京留学を経て1934年に台北帝大文学部に入学し、「東洋文学講座」を選択した。彼は東洋文学講座を選んだ理由として、父である黄純青の「自分の文化を忘れないように」という意思に従ったと述べているが、それは実に矛盾した選択であったといえよう。なぜなら台北帝大の東洋文学講座とは、伝統的な儒教倫理に基づいた詩文を研究する講座ではなく、中国と他国あるいは他民族との関係についての学問、つまり外交史などを中心に研究する講座であった。それは台湾と密接な関係にあつた「中国」を相対化し、批判しうる近代的知を養成する学問でもあつた。つまり黄得時の東洋文学講座への入室は、「自分の文化を忘れないように」という父の希望に反映するものであつたが、一方では生来の漢学の教養を土台としながら、それに加えて帝国アカデミーによる「東洋学」的知を身につけることを可能にしたのである。その「知」は植民地社会における黄得時の立ち位置を決定づけるものとなつた。

1937年3月、黄得時は「『詞』の研究」を提出して台北帝大を卒業し、『台湾新報』に就職した。そこで黄得時は当時新鋭作家の中篇小説を連載させるなどの仕事を行うが、同時代の台湾の文学者からは「漢文が専門だから日本文学がわからない」「『帝国学士』の新聞編集者」といった不評も寄せられた³⁴。呂赫若も「日記」のなかで「糞リアリズム」論争中の黄得時を「両面刀鬼」と罵倒している。また、1942年黄得時は『国語新聞』において、台湾における日本国民精神昂揚のための国語運動推進を唱えた文章を発表したこともある。こうした一連の黄得時の動きは同一民族への共感を欠いた不可解な行為に見える。しかし、前述の『国語新聞』とは、台北帝大総長・国語教授である安藤正次が支援する刊行物であり、「糞リアリズム論争」の主要論客西川満と濱田隼雄の背後には、黄得時とも緊密な関係を持つ島田謹二の影があつたと考えられる。つまり、1940年代という戦争体制が濃厚になるにつれ、民族などの境界線もときに曖昧となる時代において、黄得時が物事を判断する基準は、もはや「民族」ではなく、「帝国学士」に象徴できる「帝国」の力にあつたと考えられる。

黄得時が学んだ帝国アカデミーの「東洋学」とは、「中国」を相対化するばかりか、中国との戦争を座視し、さらには協力する姿勢を生み出すものであった。1930年代後半、日本が中国華南地域を占領するのに伴い、廈門大学の蔵書が台北帝大の所有となるが、その蔵書の整理に「東洋学」の諸学者が関わった記事が台北帝大『学内通報』に頻出している。例えば、「1938年7月24日から12日間、文政学部教授移川子之蔵と助手宮本延人が廈門大学整理並び土俗学、考古学資料調査のため、また教授神田喜一郎が同大整理並び東洋文学資料調査のため、廈門へ赴いた。」「南方土俗学会例会 5月18日午後2時より文政学部土俗人種学研究室に於て忽那・浅井両氏を中心として南支視察感想座談会を開催せり」というような記事がある。台北帝大において、こうした「東洋学」を学び、「ナショナル」な知を身につけた黄得時もまた、すでに民族や伝統といった「ルーツ」を相対化させ、「帝国」を優先させるのは当然であったといえよう。

むすび

島田謹二は論文「台湾の文学的過現未」（1941年）において、台湾文学の「未来」について、作家が「台湾在住の諸民族の言語・慣習・宗教・祭典・思想等」に精通し、「従来への如く単なる空想の所産ではなく、人種学・心理学・歴史学・宗教学など各般の学問的研究に充分なる基礎を」置いて創作することへの希望を述べている。さらに文学が「学術的研究」に基礎を置く必要性に言及し、「今日台北帝国大学はその種の分野の学術的研究を以て、その一つの重要な任務」を遂げたので、「今後の台湾の作者はこの地における学術の淵叢と連絡して、その文学を雄大ならしめ」るべしと述べた³⁵。

この主張は、植民地文学の特性を把握するためには「先行状件として社会史上文学史上の精細的確なる事実が説明せられねばならぬ」と述べた最初の論文「南島文学志」（1936年『台大文学』掲載）における主張と共通する。ただし「南島文学志」では、創作への希望よりも、「われわれはまづ台湾に於ける、また台湾に関する文学現象」を「西洋（特に蘭西二国）文学・支那文学・日本文学の三方面」から「精細な史的考究」を着手しなければならないという研究への期待を述べていた³⁶。しかし、島田が「台湾の文学的過現未」を執筆した1940年代には、台湾は既に植民地としての社会制度が整い始めていたため、同地での文学は政治・民族・社会状況を背景としてこそ、豊富かつ「雄大」な成果をあげることができると期待したのであろう。また、既に台大における台湾の文学の特性についての考察が着実に進歩したことも期待を述べた一因であったろう。『台大文学』には教授群を中心として様々な論文が発表されている。例えば島田謹二の文学研究「華麗島文学志」をはじめ、福田良輔の国語に対する見解、神田喜一郎・原田季清の中国文学研究、佐藤文一の原住民考察が掲載された。また学生や卒業生、たとえば稲田尹の台湾歌謡研究、新垣宏一のロッチェ論なども島田謹二が述べた台湾の文学に関する学術研究に類するものであった³⁷。このような学術の進歩を受けて、島田は学術的な研究に基づいて文学に従事せよという指示を台湾の作家に与えたのであろう。

さらに重要なのは、文学創作の要素に欠かせない「言語・慣習・宗教・祭典・思想」と、その

基盤となる「人種学・心理学・歴史学・宗教学」は、全て台大文政学部の主要学問として「東洋学」の射程に入る点である。台大文政学部には、『文政学部紀要』及び『文学科研究年報』という本格的な学術雑誌があった。『文政学部紀要』に掲載された「東洋学」関係の論文には、第1巻第1号(1928年)の藤田豊八論文、第2巻第1号(1933年)の村上直次郎の新港文書論文、第3巻第1号(1936年)のARUNDELL DEL RE論文、第4巻第1号(1939年)の浅井恵倫のシラヤ語論文の四本が確認できる。『文学科研究年報』は後に『言語と文学』と改名されて発行されたが、第1輯(1938年3月)には安藤正次「四段活用動詞の構成について」が掲載され、第2輯(同年同月)には原田季清「話本小説論」が、第3輯(1938年6月)には工藤好美「サミュエル・バトラー—彼の思想と芸術とに関する一つの覚え書」などの論文が掲載された。刊行数の少なさと論文の質の高さから見て、『文政学部紀要』と『文学科研究年報』はいずれも選び抜かれた学術論文のみ掲載した本格的な学術雑誌であった。それに対し、『台大文学』は準学術的な雑誌として、研究ノートやエッセイ、専門外の論文などを発表するのに絶好の場所であった。例えば島田謹二の「台湾の文学」に関する本格的な論考「華麗島文学志」は、はじめ「南島文学志」の題名で『台大文学』に発表されたものである。また、1940年に漢文誌『南国文芸』創刊に力を貸した神田喜一郎は、中国文学研究から漢文学へという関心の対象の変化の過程を『台大文学』に掲載している³⁸。台湾歌謡の研究者である稲田尹も、最初は中国の古典文学「遊仙窟」や「紅樓夢」の書誌学的研究から出発し、やがて台湾歌謡の採集と研究に転進した。前島信次は文政学部の助手として長く勤務したのち、戦後、日本のアラビア学の重鎮となるが、彼も白鳥庫吉と藤田豊八に師事して東洋史を学んだ後に台湾でフィールド・ワークを行い、『台湾の瘟疫神王爺と送瘟の風習に就て』を世に送り出している³⁹。

こうして日本の帝国大学アカデミーが生んだ「東洋学」が「中国」との距離を見直す過程において「発見」されたのが「台湾」であった。1940年代、発見された「台湾」は民俗色に満ちた文学作品の創作要素として再現される。その過程において重要な役割を果たしたのが、西川満と黄得時であった。両者は異なる民族に属し、異なる文学的素養の持ち主であったが、どちらも台大文政学部の「東洋学」の「知」によってそれぞれのエスニック・グループから離れ、「帝国」台湾の文壇で活躍するに至る。帝国大学アカデミーという権威は、内地人・本島人両側の文学者を巻き込み、文壇での影響力を強めていった。その力が、また時には両者の手を結ばせ時には両者を対抗させる中で、1940年代の台湾文学は成立したのである。

注

- 1 島田謹二「台湾の文学的過現末」(『文芸台湾』2-2、1941年5月)。黄得時「台湾文壇建設論」(『台湾文学』1-2、1941年9月)。
- 2 和泉司「憧れの『中央文壇』—1930年代の『台湾文壇』形成と『中央文壇』志向—」(島村輝等編『ポストコロニアルの地平』世織書房、2006年)。
- 3 工藤好美「台湾文化賞と台湾文学」(『台湾時報』279、1943年3月)。台湾糞リアリズム論争については、垂水千恵「『糞realism』論争之背景—與《人民文庫》批判之關係為中心」(『葉石濤及其同時代作家文學國際學術研討會論文集』、春暉出版社、2002年2月)を参照。

- 4 西川満と《文芸台湾》について、中島利郎教授による一連の研究成果に負うことが多い。中島利郎「西川満論」(神谷忠孝・木村一信編『(外地) 日本語文学論』世界思想社、2007年)、「第一章 西川満と日本統治期台湾文学」(同著者『日本統治期台湾文学研究序説』緑蔭書房、2004年)などが参照になる。
- 5 「台湾文学発刊の辞」(『台大文学』第1巻第1号、台北帝国大学構内・台大短歌会発行、1936年1月)
- 6 殆ど1934、35年に入学。
- 7 「余滴」(『台大文学』第1巻第1号、台北帝国大学構内・台大短歌会発行、1936年1月)
- 8 『台大文学』第5号(1936年10月)
- 9 「俳詩」とは原文のままである。
- 10 「余滴」(『台大文学』第1巻第6号、1936年12月)
- 11 「後記」(『台大文学』第5巻第2号、1940年5月)
- 12 植松安「国文学にわけ入りし頃(終)」(『台大文学』第2巻第3号、1937年6月)
- 13 裏川大無、中山侑、島田謹二ら内地人の文芸活動を回顧した文章に、本島人の文芸活動に対する遠慮が見出せる。
- 14 裏川大無「台湾雑誌興亡史(二)」(『台湾時報』184、1935年3月)101～106頁。
- 15 当時、文政学部長であった東洋史教授の藤田豊八である可能性が大きい。
- 16 裏川大無、前掲文。中山侑に関する研究は中島利郎「中山侑という人」(『日本統治期台湾文学研究序説』、緑蔭書房、2004年3月)31～80頁、及び鳳気至純平「中山侑研究—分析他的『灣生』身分及其文化活動」(台南、國立成功大學台灣文學研究所、2006年修士論文)が参考になる。
- 17 裏川大無「台湾雑誌興亡史」には「台北詩人聯盟」と記されているが、これは誤植である。
- 18 『台湾めざまし』と『にひたか』。
- 19 村上玉吉『台湾文芸』第3号(1902年)。引用は裏川大無「台湾雑誌興亡史」(一)(『台湾時報』183、1935年2月)による。
- 20 志馬陸平(中山侑)「青年と台湾(七) 文学運動の変遷」(『台湾時報』203、1936年10月)。
- 21 裏川大無「台湾雑誌興亡史」(二)(『台湾時報』184、1935年3月)101～106頁。
- 22 中島利郎、注16前掲文、56頁。
- 23 『帝国大学一覧』昭和3年～昭和7年度「職員」欄にて確認。
- 24 志馬陸平(中山侑)「青年と台湾(二)、(九)」(『台湾時報』197、1936年4月；同205、1936年12月)。
- 25 この文章は、題名「南方田舎文壇」に「いんちきぶんだんうわさばなし」とルビをふり、また題名の前に「長篇講談(ルビ：こつけい)」をつけるなど、旧左翼文学青年の現状を皮肉ってみせたものであった。
- 26 島田謹二「回想」(『媽祖』第16冊、1938年3月)。
- 27 「彙報『台湾愛書会』成立小記」(『愛書』第1輯、1933年6月)206～207頁。
- 28 「解題に代えて」(『愛書』復刻付録、龍溪書舎、1980年8月)。
- 29 大無「六号雑記」(『愛書』第2輯、1934年8月)。
- 30 「編集後記」(『愛書』第3輯、1934年12月)
- 31 「編集後記」(『愛書』第6輯、1936年4月)。
- 32 島田が西川の作品について書いた評論の分析は別稿に譲るが、島田の前掲文は二人の癒着を匂わせる。
- 33 戸川芳郎「倉石武四郎」(『東洋学の系譜』第2集、大修館書店、1994年9月)、201頁。
- 34 柳川浪花、「淋しき昭和十二年の本島文芸界」(『台湾公論』3-1、1938年1月)
- 35 島田謹二、前掲文。
- 36 島田謹二「南島文学志」(『台大文学』第1巻第5号、1936年12月)。
- 37 『学内通報』第159号、台北帝国大学、1936年9月30日。
- 38 神田喜一郎と『南国文芸』については柳書琴「文化遺産與知識闘争」(『台湾文学研究学報』第5期、国家台湾文学館、2007年10月)を参照。
- 39 三省堂、1938年。